



教育目標 英知の風かおり 友愛の情ふかく 精励の志つねに

中野中学校だより

令和4年12月22日(木) 発行 第8号

『 挑戦 』

校長 田代 雅規

日本漢字能力検定協会は12月12日、一年の世相を漢字一字で表現する今年の漢字を選出し、京都・清水寺で発表しました。今年の漢字は、「戦」でした。22万3768票の応募があり、「戦」が1万804票(4.83%)を集めて第1位となりました。

この「戦」という漢字を広辞苑で調べてみると、「戦う」は

- ① 叩きつづける。また、撃ち合って勝ちを争う。
- ② 互いに兵を出して攻め合う。戦争する。
- ③ 互いに力・技・知恵などを比べて優劣を争う。
- ④ 障がいや困難などをのりこえようとする。 とありました。

2022年は、ロシアのウクライナ侵攻により、「戦争」の恐ろしさを目の当たりにした一年でありました。

また、円安や物価高による生活面での「戦」いでもありました。スポーツ界では、11月からサッカーのワールドカップがカタールであり、互いに力や技を出し合い、素晴らしい「熱戦」が繰り広げられました。日本チームもワールドカップで優勝経験のある強豪ドイツやスペインに予選リーグで勝利し、決勝トーナメントに進出しました。試合での「熱戦」、これが「戦」が選出された理由となっているようです。

中野中の1年間を振り返ってみると、まだまだ続くコロナ禍で、今年は開校して11年目を迎えました。5月に実施した開校10周年記念運動会や10月の開校10周年記念合唱コンクールは、コロナ禍でも、何とか楽しい、思い出に残る行事にしようと実行委員会の生徒を中心に新しいことに「挑戦」しました。運動会では、生徒からアンケートをとり今までにないオリジナル種目の実施やボランティア生徒による大会運営、合唱コンクールでは、希望生徒による有志合唱も行いました。

11月の開校10周年記念式典でも、吹奏楽部は先生と生徒と一緒に演奏し、有志によるK-POPダンスやブレイクダンスにも「挑戦」しました。この「挑戦」にも「戦」という文字が入ります。

「挑戦」の意味は、広辞苑には、「たたかいをいどむこと」の他に、「積極的に行動を起こすこと」とありました。2022年、中野中の生徒たちは、学校行事だけでなく様々なことにあきらめずに自分たちで考え、「積極的に行動」を起こしてきました。

「成功の反対語は？」と聞かれると、多くの人は「失敗」と答えます。しかし、成功した人の中には「成功の反対語は、チャレンジしないこと」と言う人がいます。世界の発明王エジソンは、「私は失敗したことがない、ただ1万通りのうまくいかない方法を見つけただけだ。」と言います。エジソンは、何回も失敗しながら、あきらめずに「挑戦」し続けたからこそ、世界の発明王と言われるようになったのだと思います。

あと、数日で2022年が終わります。中野中生には、2023年も自分たちで考え、失敗を恐れずに「挑戦」し続けてほしいと願っています。





『言葉の重み』

鈴木 旺大さん（1年）

私は、小学校六年生のとき友達に言われた言葉でいやな気持ちになったことがありました。しかし、友達に聞いてみると冗談でいったつもりだと言われました。私は、友達と仲直りすることができましたが、仲直りできていない人もいるのだなと思いました。言葉というものは、相手がどんな気持ちになるか考えて発言しなければならないと思いました。しかし、言葉というものは人を前に出してくれたり、勇気を出させてくれたりします。言葉に重みがあり、もしかしたらその人の人生が変わってしまうかもしれません。

また、その人との関わり方が変わって誰かが変わるきっかけにもなると思います。そんなことにならないために状況をみたり相手のことを気付かうこともそのことの第一歩ではないかと考えました。

テレビをつけてニュースなどをみるとネットの発言で自殺してしまった人などが流れます。私は幸いにもそういう経験をしていませんが、いつ誰が、加害者、被害者になってもおかしくないなと思います。ネットの発言は相手の顔を見たりしていないので気軽に書き込んでいる人がいます。それを見た相手側はいやな気持ちになるかもしれません。自分の中で冗談でも相手はその一言で死んでしまうこともあります。書き込む前にその文字をもう一度読み直して相手がいやな気持ちにならないかどうかを確認することがとても大切だと思います。

私は、人間が変わることは難しいと思います。しかし、更生しようとしている人を支える人がいれば少しは難しくなくなるのではないかと思います。ほんの少しのかけた言葉でその人は前を向いて生きることができると思います。

例えば、更生するときに悩んでいることを聞いてもらい、どうすればいいかかけてもらった言葉をきっかけに変わることがあると思います。こういうことで、変われなかったとしても少しずつ変わろうという気持ちやそういうきっかけを作る行動に移してくれる人が増えれば、社会はより良くなるのではないかと思います。また、自分たちからきっかけを作るということもまたもう一つのルートだと私は思いました。

言葉は、相手に自分の気持ちを伝えるということが主です。しかし、使い方を間違えると相手をいやな気持ちにさせてしまうかもしれないものです。また、誰かが変わるきっかけにもなるのだと気付きました。声をかけるそれはときには怖いことですが、その人のきっかけになることかもしれない大切なことです。言葉は相手を知るきっかけになるかもしれません。

そして、私は誰かが変わるきっかけになるような言葉をかけられるような人になりたいです。



津田 樹花さん（2年）

一瞬の 軽い気持ちが 魔の一步

『 スカートををはく理由 』

住田 愛結さん（2年）

私が中学校に入学した当初、クラスにスラックスをはいている女の子がいた。初めはほんの少し、驚きと戸惑いがあったが、同時に「カッコいいな」「似合っているな」とも感じた。スラックスをはいている人が全員そうというわけではないが、LGBTQの日本人の割合は、3～10パーセントだと言われている。そんな中で、スカートをはいている中学生の男子が主人公の、「笹森くんのスカート」を手にとった。ジェンダーに関することについては、ほぼ無知だった私にとっては、自分のジェンダーについての考え方をぐっと広げてくれる一冊となった。

私は、体の性別、心の性別、共に女性で、いつもスカートをはいて学校に行っている。今までスラックスをはいていた登場人物の笹森くんがスカートをはいて学校に登校したところを読み、自分もスラックスをはいて登校したらどうなるか考えてみた。

もし、私がスラックスをはいて学校に行ったら……。初めは緊張するだろうなと思った。少し目立って、周りから見られるだろう。男子がスカートをはいてきたら特にそうかもしれないが、理由を探られることもある。そんな怖さがあるだろうと思った。

もし、本当にクラスの男子がスカートをはいて登校してきたら、私は正直驚いてしまうと思う。トランスジェンダーなのではないかという意識もしてしまうと思う。それは「スカートは女子のものである。」「男子はスカートを好まない。」という先入観があったからだと思う。だが、本文のある言葉で、男子がスカートをはいても良いのだと気づいた。

「スカートなんて、服の一形態でしかない。」私は見るべきところは何をはいているか、ではないのだと痛感した。スカートをはいている男子もスラックスをはいている女子も、何も変わらない普通の中学生である。それを周りが勝手に理由付けをして、深刻化させてしまっているのだ。

この本には、複数の中学生の話が登場する。汗っかきの子や両親がどちらも女性である子、体型がぼっちゃりしている子、容姿がかわいいことでねたまれた経験から目立たないようにしている子、スカートをはきたくないと思っている女の子、その女の子の気持ちを理解しようとスカートををはく男の子など。特に印象に残ったのは、両親がどちらも女性であることやスカートををはきたくないと思っていることをその本人が、周りにカミングアウトする場面だ。カミングアウトする事によって、その自分を周りに認めてもらえなかったり、否定されてしまったりするかもしれない。そんな怖さがありながら、自分のありのままの姿を伝えたことは本当にすごいなと思う。

本に出てきた登場人物の多くは、自分の体の特徴や様々な事情に対する他人の言動で、傷つけられた経験がある。なぜ他の人と少し違うところがあると、攻撃されてしまうのか。その答えの一つを本文の中に見つけた。「安易な判断で、デリカシーのないことを言ってしまう。」、体の特徴や様々な事情がある人を傷つけてしまうのは、言葉を深く考えずに発してしまったからだと思う。それを言われた時のその子の気持ちをきちんと考えることができれば、もっとその子のことを気にかけて言葉をかけてあげられたらと思う。

この本を読んで、考えたいと思ったことがある。「ジェンダー平等」とはどういうことだろうか。私は、LGBTQの方の話の聞いたり、ジェンダーマイノリティについて知ったりした際は、その人たちのことをもっと配慮しなくてはいけないと感じた。しかし、そのように思っている時点でLGBTQの人たちを特別扱いしてしまっているようにも思う。女の子がスラックスを選ぶことに、また男の子がスカートを選ぶことに理由なんかいらぬ。何か深刻な理由があるかもしれないけれど、周りが見るべきところはそのことではない。性別など関係なく、気にせず、様々な人がいることを全員が当たり前のこととして受け入れること。それが「ジェンダー平等」だと思う。学校生活で、全ての子が好きな理由で好きな制服のパターンを選ぶということが当たり前になってほしいと願う。「笹森くんのスカート」を読み、この世界は自分が思っているよりも広いのだと感じた。世界では、「人々の平等」が求められている。その中で、世界に本当に様々な人がいるのだということを理解すること。上辺だけの見た目や特徴で人を判断するのではなく、心の扉を少し開けて、いろいろな人と関わってみることが大事だと感じた。これから、個性豊かな人々がもっと多様に生きている、そんな面白い世界が訪れてほしいと思った。



『 買いたくない 』

六年生のときにお母さんとスーパーマーケットに行った日のことです。隣にいた子ども連れのお父さんが「中国産の物は買わない方が良い。汚いし、食べたら体に良くない。僕は国産の物しか食べない。」とっていました。

私は家に帰り、中国産の食べ物について調べてみました。調べたところ、「食べたくない」、「危険」とたくさんの悪い結果が出ました。私は、これを見て心が割かれるくらいとても悲しくなりました。

私は、一人の中国人です。中国人は悪い人、汚い人でしょうか。私は小学生の頃自分が中国人だというせいで嫌な思いをたくさんしてきました。「中国人は汚い物を食べているらしいよ。」

「中国は怖いところだから中国人には近づかない方が良い。」といろんな人に偏見をもたれ、言われた言葉一つ一つがとても心に刺さり、今でも記憶に残っています。また、私が中国人であるから友達をやめた子もたくさんいました。会うたびににらみつけられたり、汚いから机を離したりもされました。私は何で自分が中国人であるというだけで、何もしていないのにいじめられなければならないのだろうと何回も思いました。中国人であるだけなのに。

こんな辛い思い出もあったので、「中国産のものは買わないようにしよう」という言葉にも、私はとても悲しいと感じました。確かに中国では食べ物でいろいろな事件が起こったことがあります。でも、すべてのものがそうなっているわけではありません。安全なものもあります。だから、中国全体に対して良くないと思うのはちがうと思います。それは人に対しても同じです。その人がどんな国にいたから悪い人だと思うことも良くない考え方です。その人は、別に何の悪いこともしていないのに、差別されるととても落ち込みます。

生まれた国、肌の色、文化、病気、事故や事件によって自分と違う人やものから自分を守るために差別や偏見が生まれるのだと私は思います。無意識のうちに、私も私の家族も実は差別をしているのではないかと思います。私も私の家族も整っていない国のものは買いたくないと思うことがあります。自分でもあまりそう思わないようにしようと思っていてもつい考えてしまうことがあります。自分が思い描くように暮らすため、または自分が危険にならないためにどうしても差別することをやめることはできません。このように考えると実は私もいろんな国の方々と差別してきたと思いつつも悔しくて仕方がありませんでした。

でも、本当に差別や偏見を悪いことだと思うなら少しでも、どんなに小さいことでも解決する方法を見つけて、実行することが大切だと思います。そこで私は二つの方法を考えました。一つ目は、食べ物に対してすべてが食べると危ないものではないので、危ないもの、危なくないものと決めつける前に自分で調べてから買うと良いと思います。そして、二つ目に外国の方々と接する時はいろんな偏見をもつ前に、自分から声をかけると良いと思います。すると、以外に良い人かもしれません。

私は差別されていた時のことを考えながら少しずつでもいろんな国の方々と平等に楽しく話したいと思います。

差別や偏見は、皆経験があるはずです。優しい人も厳しい人も。だから、無くすことは簡単にはできません。けれど、自分の近くにいる人たちには、接し方をかえることはできると思います。いつか、少しずつでもいろんな国の方々が暮らしやすくて、楽しくお話できるような世界になるようになってほしいと思います。